審 査 講 評　日本水大賞委員会　審査部会長　虫明功臣

日本水大賞審査部会より、第8回（2006年）「日本水大賞」への応募状況ならびに審査・選考の経過についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水環境・水資源・水文化・水防災等の分野の専門家や学識経験者17名で構成されています。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。今回から、大臣賞として新たに“経済産業大臣賞”が設けられ、大臣賞は六つになりました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、“大賞（グランプリ）”をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

応募状況：

今回の応募総数は159件で、昨年の238件に比べてかなり減少したのは残念ですが、全体として力のこもった優れた活動が多かったというのが、審査・選考に係わった者の強い印象です。地域別に見ると、鳥取、徳島、高知、佐賀、鹿児島の5県を除く42都道府県から応募がありました。応募総数の減少とともに応募のない県が増えていることに対しては、今後広報活動を強化する必要があると考えています。活動主体別に見ると、各主体別の割合は昨年と大きな変化はなく、団体が66％、個人が15％、学校が14％、企業と行政がそれぞれ2.5％となっています。活動分野別では、例年と同様に、水環境に係わる件数が最も多く半分以上を占めており、次いで、水文化、水資源、水防災の順になっています。

審査結果：

第8回日本水大賞・グランプリの栄誉を勝ち取ったのは、福井県「福井農林高等学校」の「農業水路への設置を目的とした小規模水田魚道の開発による環境保全活動」と同県「足羽川堰堤土地改良区連合」の「農業水路に生きものの賑わいを取り戻す地域づくり」の互いに連携した活動です。水田と河川の生態系ネットワークの復活を目指して、管内の小学校、市民団体とも協力しながら、生態調査、ビオトープの造成、農業水路や水田への魚の復元などの活動によって豊かな田園地域づくりに実績を上げている点が高く評価されました。

国土交通大臣賞には、東京都「特定非営利活動法人　あらかわ学会」の「様々な立場の人が集う大都市河川・荒川における合意形成手法」が選ばれました。荒川セミナー、学術講演会、論文発表、展示会、会誌や図書の発行など多様な活動を通じて、河川に対する関心と理解を深め、荒川を中心とした地域社会・まちづくりに共通意識を育む地道な試みが高く評価されました。

環境大臣賞には、愛媛県「愛媛県立伊予農業高等学校 伊予農絶滅危惧海浜植物群保全プロジェクトチーム」の「愛媛県伊予郡松前町塩屋海岸における絶滅危惧海浜植物群落の保全活動」が選ばれました。科学技術的にレベルの高い綿密な調査研究を基礎としながら、産業界、大学、行政、漁協、環境団体などとも協力して、絶滅危惧種の保全・復元活動を幅広く実践していることが高く評価されました。

厚生労働大臣には、福岡県「筑後川まるごと博物館実行委員会」の「筑後川まるごと博物館」が選ばれました。4つの県に跨る筑後川流域の自然、文化、歴史、産業などを“ひとつの博物館”と見立てて、大学との連携による公開講座、学芸員の養成、上流域・中流域・下流域の自然保護、風土文化、河川環境再生、地域振興などの諸団体とのネットワーク作りなどの多彩な活動により、流域圏交流システムを構築しようというユニークな試みが高く評価されました。

農林水産大臣賞には、岩手県「胆沢平野土地改良区」の「農業用水の機能維持増進活動」が選ばれました。約100km^2の広大な管区と長い歴史の中で形成された農業用排水路と水利施設を持つ土地改良区がリードして、地域住民、小学校、企業などを巻き込んで用排水路や水利施設の地域用水としての機能を増進するために、アダプト制度による水路の清掃、水の総合学習、ため池の生態系保全、水

源涵養のための植樹、水文化の継承など、多彩な活動を展開している点が高く評価されました。

文部科学大臣賞には、宮城県「仙台市立北六番丁小学校」の「北六 梅田川プロジェクト〜ITを活用し、豊かな体験活動を取り入れた環境交流学習〜」が選ばれました。身近な小河川をフィールドとして、五感での体験による課題の発見から課題解決へのアプローチ、そして問題解決への実践活動へと段階を踏んだ教育的成果を上げている点、また、上流小学校、大学、町内会との交流やホームページの充実など社会的な連携や発信活動を重視している点が高く評価されました。

経済産業大臣賞には、三重県「シャープ株式会社　AVC液晶事業本部亀山工場」の「シャープ亀山工場における製造工程排水の100%リサイクル」が選ばれました。“スーパーグリーンファクトリー”を標語として、日量13,000m^{3}に及ぶ液晶パネル生産工程の水をすべて回収し再利用する排水ゼロエミッションを達成している上に、生活排水や空調排水も協定値や排出先河川の水質よりきれいな水に処理して放流し、地域環境との共生に尽力している点が高く評価されました。

市民活動賞には、神奈川県「特定非営利活動法人　相模川倶楽部」の「相模川流域における不法投棄ごみ対策活動と子供たちへの環境学習」が選ばれました。行政では手の届かない活動を市民自らの手で行うことをモットーとして、相模川河川敷を中心にごみの投棄の巡回監視、GRSを不法投棄ごみの種類や場所の調査とマッピングなどを実施して、行政の不法投棄軽減対策に協力するとともに、投棄タイヤの収集・リサイクル事業を進めていることが高く評価されました。

奨励賞としては次の3件の活動、①兵庫県「兵庫県立農業高等学校 県農ため池調査班」の「守れ‼先人の財産〜いなみ野ため池群世界遺産化計画」、②千葉県「市川市」の「市民あま水条例の制定」、および③静岡県「安倍川フォーラム」の「みんなで守ろう安倍川の清流〜夏の一日、子供達と楽しみながら〜」が、今後の発展、あるいは他地域への波及が大いに期待できる活動として選ばれました。

審査部会特別賞は次の2件、①兵庫県「近畿大学附属豊岡高等学校 豊岡水害風化防止ネット」の「高校生を対象とした台風23号に関する防災意識調査および水害の教訓保存」、ならびに②栃木県「特定非営利活動法人　足尾に緑を育てる会」の「渡良瀬川源流の森再生プロジェクト」に授与することが決まりました。

なお、今回は残念ながら国際貢献賞に値する活動の応募はありませんでした。

今回は応募件数が少し減ったとは言え、全国各地で大勢の方々が、熱意の伝わる活動、独創性に富んだ活動、地道に継続している活動、など、など、多彩・多様な水に係わる活動を広く行っておられることに接し、水分野で仕事をするものとして大変力づけられ、感動を覚えます。皆様のご努力に敬意を表しますとともに、活動のますますの発展と深化を祈念して、講評の締めと致します。

審査講評　日本ストックホルム青少年水大賞審査部会長　千賀裕太郎

賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校の生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテストに日本代表として参加することになります。2005年に日本代表に選出された北海道札幌拓北高等学校は、「沼地の富栄養化による植生の遷移とトンボ相の変化―人為的に造られた自然の多様性を維持するために」と題して25ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の高い評価を得ましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は、全国から10校13件（北海道1件、関東4件、近畿5件、中国1件、四国1件、九州・沖縄1件）の応募がありました。いずれも高校生らしい身近な水環境・水資源を対象にした力作ぞろいの自主研究でした。なお本年から審査をより充実させるため、書類審査を通過した上位の高校に対して面接審査を行って最終受賞候補を決定することとしました。

審査経緯：

審査は5人からなる審査部会において、第一次審査（書面）、第二次審査（面接）にわたり、ストックホルム・ジュニアー・ウォータープライズの国際コンテストの審査基準に従って、厳正に行われました。第一次審査は、審査員が書面での事前採点結果をもとに協議し、二次審査の対象とする3校（埼玉県立松山高等学校、京都府立桂高等学校、愛媛県立伊予農業高等学校）を選抜しました。第二次審査では、パワーポイントでの発表が円滑になされるか心配しましたが、3校とも自らの活動を効果的にアピールするとともに、審査員からの質問にも的確に答え、応募者のレベルの高さを実感させられました。審査部会は以上の結果をもとに慎重に協議して授賞候補（大賞および審査部会特別賞）を選考し、これをもとに日本水大賞委員会において授賞が最終決定されたものです。

審査結果：

日本ストックホルム青少年水大賞に輝いたのは京都府立桂高等学校の「小さな“CASE”の大きな可能性－究極の水循環で90億人の食を守る」です。同校草花クラブは世界最小のアジサイ品種を作出して農林水産省に品種登録するとともに、苗を障害者施設と共同栽培・出荷する「学・福・産」連携システムを構築しました。そして障害者にも可能なシンプルな挿し木苗栽培法として、19世紀に世界でプラントハンター達が船舶での植物長期間輸送器として用いていた「ウォード箱」を、工夫を重ねて栽培容器に改良し、密閉して無潅水の状態で長期間栽培を続けることに成功しました。今後はこの桂版ウォード箱である「Katsura Nursery Case」を用いた超節水型栽培法を稲などの穀物生産にも適用し、水不足で困っている世界の多くの地域での食糧生産に役立てたいとしています。審査員一同、ストックホルムでの健闘を心から期待するものです。

また、審査部会特別賞を次の2校に授与することとしました。埼玉県立松山高等学校生物部は、都市近郊地域の3面コンクリート張りの水路であっても、条件によってはサンショウウオが生息できることを豊富な現場調査によって実証しました。都市化が進行している地域でも、自然生態系の修復・保全の努力が無駄にはならないことを訴えました。問題解決型の優れた研究活動として更なる発展が期待されます。愛媛県立伊予農業高等学校伊予農絶滅危惧海浜植物群保全プロジェクトチームは、塩屋海岸において固有植物種の絶滅が進行している現状を自ら詳細に調査するとともに、産・官・学・民の地域連携をコーディネートしてその要因を解明し、絶滅種の保全や蘇生の可能性を訴えました。地域での自然保全運動の中核となる地道な研究活動の更なる発展が期待されます。

最後に、今回受賞された高校の皆さんにはもちろんのこと、惜しくも受賞にいたらなかった他の高校についても、大変熱心な研究活動を行った生徒の皆さん、そして熱心にご指導された教員の皆様に、審査部会委員一同より、心からの敬意を表明して審査講評といたします。